第１回研究会

野に出て生活を学ぶ・地域の光をデザインする

―エコミュージアムによる地域づくり―

京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻 生活環境科学　教授
三橋　俊雄

〈内容報告〉 牛尾洋也

まず、中心論題の前提として、三橋氏は「遊び仕事を通したSubsistenceの再考」について説明された。三橋氏は、「野に出て生活に学ぶ」という目線から、学生たちと丹後半島の農山漁村を訪れ、その地で自然と共に暮らしてこられた方々から、自然との付き合い方や生活の知恵などを教えられたという。「遊び仕事」とは、私たちも自然の一部であるという観点から、まずは、自然と人間とのあり方を問い直す環境倫理学から生まれた概念であり、海のたこ釣りや川のウナギ捕り、山の山菜摘みなど、大人たちがわくわくして自然の中に身をおいて身体を媒介として対象物との出会いを求める行為であるという。それは、「子供の遊び」と「経済活動としての生業〔サブシステンス〕」の中間に位置するものという。

次に、三橋氏は、丹後の農山村の生活が、イヴァン・イリイチの言う「サブシステンス（自立自存）」な生活であることに気付き、とくに3.11以降、復興に向けた人々の生き方の中に現代人が忘れかけている「自分の力で生きる＝サブシステンス」の生き方の重要性を見出したという。そこで、三橋氏は、持続可能な社会づくりとは、「遊び仕事」という自然の付き合い方を楽しんだり、先人の「サブシステンス」な生き方を学び、現代に生かしてみる行動の中にあるとする。

こうした見解を基礎に、三橋氏は、「地域の光をデザインする」とは、地域に出向き人々の話をよく聞いて、地域のすばらしさ、価値を実感し、その価値を活かしてコトやモノをデザインする意味であるとする。

三橋氏は、桶職人の山本鉄治氏のライフスタイルおよび桶づくりの現場から、使用価値の世界を学び、さらにブリコラージュによるものづくりの世界を学ぶ意義を説く。氏は学生たちが環境共生教育演習の経験を通して、持続可能社会を探求するための「自然・暮らし・文化と共生する力」を学ぶ実践を語る。

こうした経験から、三橋氏は、当該地域のすべてが「残したい」「伝えたい」「楽しみたい」、生きた博物館であり舞台であると考える「エコミュージアム」による地域づくりの必要を訴える。それは、地域の魅力や光を面ととらえて保全と活用を図り、それらを建物の中に持ち込むのではなく、本来の場所、生活の現場で保全し発信してゆくことと述べる。そのためには、専門家や外部者の目を通して地域を捉え磨き上げてゆくことが大切であり、それを「地域の誇り」ととらえ地域生活の中に生かしてゆくことが肝要だと語った。